

如来の作願をたずぬれば

——往相回向の行信——

神 戸 和 磨

如来の作願をたずぬれば

苦悩の有情をすてずして

回向を首としたまいて

大悲心をば成就せり

よく読誦し、親しんでいる和讃である。また、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

という、聖人のつねの詞には、苦悩の宿業存在を生きる私たちに大悲の本願がかけられてある身であることがよく知られる。

そこには人間の作願、発願を超えて、如来に作願されている人間、如来に呼びかけられ願われている凡夫が如来の

作願に目覚めた信心、如来回向の信心の述懐が示されているといえる。親鸞の仏道了解は、二種回向の信仰思想が基になっている。『教行信証』は二種回向の教相によって教・行・信・証の四法の成就、つまり、仏弟子の道が示される。

「教巻」の冠頭を窺えば、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり、一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

と表白されている。「行巻」には、

謹んで往相回向を案ずるに、大行あり、大信あり。

「信巻」には、

謹んで往相の回向を案ずるに、大信あり。

と示される。そしてその往相回向の大行、大信という、行信を自覚的立脚地とする願生浄土の道は、「証巻」には、

謹んで真実証を顕さば、すなわちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。(中略)しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。

と述べられている。

かように「謹案浄土真宗」、「謹案往相回向」「謹顕真実証」と、往相回向の行信、そして行証の道が示されている。

浄土真宗の仏道は、「一つには往相回向」、往相回向を案ずる教行信証の道である。そして、その往相回向の背後、背景には、「二つに還相回向」という教主世尊の発遣、利他教化地の益がある。

二つに還相の回向と言うは、すなわちこれ利他教化地の益なり。すなわちこれ「必至補処の願」より出でたり。

また「一生補処の願」と名づく。また「還相回向の願」と名づくべきなり。『註論』に顕れたり。かるがゆえに願文を出ださず。『論の註』を披くべし。

と示し、

『浄土論』に曰わく、「出第五門」とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示す。生死の園、煩惱の林の中に回入して、神通を遊戯して教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆえに。これを「出第五門」と名づく、と已上

『論註』に曰わく、「還相」とは、かの土に生じ已わりて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしむるなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて、生死海を渡せんがためなり。このゆえに「回向を首として、大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」と言えり（論）、と。

と述べる。

そのように『教行信証』の思想、その骨格は、「謹案浄土真宗有二種回向」という回向の教相が根本となっているといえるだろう。その仏道開顯は天親、曇鸞の回向思想に基づく伝承であり、また宗祖独自の表白、自証に他ならない。天親菩薩の『浄土論』の「以本願力回向故」という一句、その金言は『大無量寿経』の「聞其名号信心欢喜乃至一念、至心回向……」を根幹とするところの了解に他ならないであろう。さらにその本願力回向の一心の目覚め、本願成就の我一心の目覚め、自証を本願力回向の二相に領受したのが曇鸞大師のお仕事である。それらの先師方の仏道への思索と体験を通して親鸞の独創的な浄土真宗の仏道開顯は顕揚されてくるといえるだろう。つまり、「謹案浄土真宗」の道とは、南無阿弥陀仏の名号を仏道の体とする二種回向による四法成就、仏弟子の道である。

その回向思想は、仏教一般の人から仏へという菩薩の回向思想とは一線を画するといつか、全く相違する。相違す

るとは仏道を成就する眼、仏教の史観、歴史観の相違にある。つまり、長く人から仏への道としてしか考えられなかった仏道志向が、仏から人への道として仏道の根源が掘り起こされたのである。人から仏への菩薩の道が、仏から人への菩薩の道に、仏道の志向性が転換されたのである。私たち浄土真宗の教相を学ぶ者にとつては、ごく親しく呼び慣らわしている如来回向、本願力回向という言葉は、先に述べた先師方の仏道の体験、仏道の悪戦苦闘の練磨のなかで勝ち取られてきた賜物に他ならないだろう。「正信偈」の天親章では、「広由本願力回向、為度群生彰一心」、曇鸞章では「往還回向由他力、正定之因唯信心」と、その深意が讃嘆されている。

二

「行巻」には、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれももろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かゝるがゆえに大行と名づく。

往相回向を案ずる行信の自覚は、大行、如来行の「無碍光如来の名を称する」という、名号に呼びさまされていく道のことである。「無碍光如来の名を称する」、諸仏称名の行は「もろもろの善本を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり」という、法蔵菩薩の五念門の善本、五功德門の徳本によつて成就した道のことである。その行を「大悲の願より出でたり」と結ぶ。そして、諸仏称揚の願、諸仏称名の願、諸仏咨嗟の願と伝承されてきた呼称の第十七願の願名を挙げ、「また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり」という。そして信巻の第十八願名についても「至心信樂の願と名づく、また往相回向の願と名づくべきなり」という。また『浄土文類聚鈔』では一貫して、第十七願を「往相正業の願」、第十八願を「往相信心の願」、第十一願を「往相

証果の願」と呼称している。

そのように「往相回向の願」が行信、行証の自覚を促すはたらきであることが知られる。往相回向とは還相回向に対応する願名である。回向が往相、還相の二相によって衆生に開かれてくることである。

『論註』では上巻の終り、『論』の「普共諸衆生、往生安樂國」の回向門を、「回向は己が功德を回して、普く衆生に施して、共に阿弥陀如来を見たてまつり安樂國に生まれんとなり」と釈している。その文に「八番問答」を設け、第十七、第十八願の成就文が連引されている。また下巻の終り、利行満足では「菩薩、かくのごとく五念門の行を修して、自利利他して、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就したまえることを得たまえるが故にと」という文を釈するところでは、無上仏道を成就する「他利利他の深義」の問答を設け、第十一願、第十八願、第二十二願の三願が引証されている。そこには先の宗祖の仏道了解である「往相回向を案ずるに、大行あり、大信あり」、また、「還相の利益は、利他の正意を顕すなり」という、往相、還相の二回向の了解の基となるべきものがあると窺うことができよう。

曇鸞大師の往相、還相の了解は、第一願偈大意では願生偈の意味を釈し、第二起観生信以下五念門の行があらわされる。さらに第三觀察体相、第四淨入願心と尋ねられていく。五念門の第五回向門のところに、

回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。

と、回向に二種の相、往相、還相が開かれてくる。以下第十利行満足では、

また五種の門あり、漸次に五種の功德を成就したまえりと、知るべし。

と、五念門の因によって五功德門の果の成就する道が示される。五念門の行とは、

礼拝門 彼の國に生ぜん意を為させんが故なり（為生彼國意故）。

讚嘆門 実の如く修行相應せんと欲うが故なり（欲如実修行相應故）。

作願門 実の如く奢摩他（止）を修行せんと欲うが故なり（欲如実修行奢摩他故）。

觀察門 実の如く毘婆舍那（觀）を修行せんと欲うが故なり（欲如实修行毘婆舍那故）。

回向門 回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に（回向為首得成就大悲心故）。

と示され、その五念門によって得られた五功德門の内容は次のようにいわれる。

礼拝門……近 門 安樂世界に生を得（得生安樂世界）。

讚嘆門……大会 衆門 大会衆の数に入ることを得（得入大会衆数）。

作願門……宅 門 蓮華藏世界に入ることを得（得入蓮華藏世界）。

觀察門……屋 門 種々の法味樂を受用す（受用種々法味樂）。

回向門……園林遊戯地門 教化地に至る、本願力の回向を以ての故に（至教化地、以本願力回向故）。

また、その五念門（五功德門）の行は、前の礼拝、讚嘆、作願、觀察の四功德は入の門（自利）、後の回向は出の

門（利他）としてあらわされる。親鸞は五念門を「入出二門」と了解している。「入」とは、『論』に、

入第一義諦者

かの無量寿仏国土の莊嚴第一義諦妙境界相十六句および一句、次第に説きつ、知るべしと。

示される。第一義諦とは、「仏の因縁法」であるからさとり境界である。その仏の自内証、第一義諦が衆生の世界を包み、「十六句（自利）及一句（利他）」というように十七種の莊嚴であらわされてくる。そのことは浄入願心では、

一国土の莊嚴十七句と如来の莊嚴八句と菩薩の莊嚴四句を広となす。入一法句を略とするなり。

と示す。浄入願心とは三種莊嚴の全体が帰する仏、如来の清淨願心のことである。その願心の目覚めとは、人間の分別心を超えた色、形のない法性、真如、涅槃に入ることである。それ故、入一法句、「略」といわれる。言葉（分別）でいいあらわすことのできない、言葉を超えた根本、心の法性に還ることである。私たちの意識は意識以上に自分を思ひ上がったたり、意識以下に自分を卑下したりして、意識が意識としてある心の法性、智慧を失っている。そういう

存在が心の法性に還るのである。そして「広」とは三種莊嚴であり、願心で象徴された莊嚴のことである。さとの目的に至る方便、道といえる。「法性法身に由つて方便法身をせず、方便法身に由つて法性法身を出す」道のことである。従つて、「三種の成就は、願心をして莊嚴せり」といわれる。

この三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨願心の莊嚴したもうところなるに由つて因淨なるが故に果淨なり、因なくして他の因のあるにはあらざるなり。

願心の莊嚴の目覚め、他力の信心、回向の信の領受とは棚からばた餅の「他因」、「無因」のことではなく、私たちの煩惱の濁世にはたらきたもう法蔵菩薩の願心に目覚め生きる自覚のことである。

三種莊嚴の成就とは次のようにいわれる。国土莊嚴十七種について、『論』には、

略して彼の阿弥陀仏国土の十七種莊嚴功德成就を説きて、如来の自身利益大功德力成就と利益他功德成就とを示現するが故なり。

といわれている。仏莊嚴の八種についても、

略して八句を説きて、如来の自利他の功德莊嚴の次第に成就したまえることを示現すと、知るべし。

といわれている。つまり、仏国土・仏の莊嚴成就は「如来の自身利益大功德力成就と、利益他功德成就」、「如来の自利他功德莊嚴」をあらわしている。

国土莊嚴（十七種）においては第一の清淨功德から第十六の大義門功德までは自利を表し、最後の十七種、一切所求満足功德は利他を示す。ここでは仏陀の目覚めた法性のみやこ、清淨功德がどのように一切衆生に満足されるかが尋ねられている。たとえば仏陀の成道を予言しながらも、仏陀の教化に遇うことのできなかつた阿私陀仙人の話を通して、法性のみやこが仏前仏後の世に生きる人びとに関わりなく、すべての衆生に開かれることが問題とされている。同じく仏莊嚴（八種）では、第一の座功德から第七の主功德までが自利を表し、最後、第八の不虛作住持功德は利他

を表す。そこには仏の正覚の座が、仏道を求めつつも二乗地（声聞、縁覚）に墮してしまふ者、さらには仏陀の教化に背いてしまった提婆達多、居伽離という人物を通して、すべての衆生を虚作することなく、住持する座として、仏の本願力、自利利他の仏道成就が推求されている。そして、不虚作住持功德から展開する菩薩の四種功德は全体が利他を表す。そのように「如来の自身利益大功德力」、仏の正覚は如来の全体をあげての「利益他功德」、衆生を利益せんとはたらく功德力に他ならない。つまり、如来の清淨願心の回向成就、大悲の誓願の力用を示しているといえる。その点は、『十地経論』、『撰大乘論釈』に説く「菩薩の自利利他」の十地の階次における菩薩、菩薩道からの仏への道とは異なっている。

『浄土論』で示される菩薩は、無量寿仏、「如来の自利利他」の誓願を背景とした菩薩、それは仏が菩薩となった、仏からの菩薩の道、法蔵菩薩の発願と修行の功德のことである。

『浄土論』の座功德（自利）には、

無量大宝王

微妙の浄花台にいます

と、仏の座が讃えられる。ゴータマ・シッダルタが尼連禪河のほとりで「草を敷き、しかして坐して阿耨多羅三藐三菩提を成」（『論註』）じた正覚の座を、天親菩薩は「無量大宝王、微妙の浄花台にいます」と讃嘆する。仏陀のこの世のお仕事は仏陀一人にとどまるのではなく、この世に恐懼し、おそれおのく衆生に唯一の基礎、根源を見出してくだされたところにある。それ故に「蓮華の王の座」に坐られたと讃える。そして、その仏の座は不虚作住持功德力（利他）としてこの世の衆生を隅なく残すことなく目覚ましめようと住持し、すべての衆生を虚作なく仏ならしめようと包み、はたらくところの大悲の誓願である。

不虚作住持は、本法蔵菩薩の四十八願と今日の阿弥陀如来の自在神力とに依るなり。願を以て力を成ず、力を以

て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願あい符うて畢竟じて差わざるが故に成就と曰う。といわれている。

浄土の「今日阿弥陀如来の自在神力」の三界を超えた仏力が、この世の穢土に生きる衆生を包み、「本法蔵菩薩四十八願」に目覚ましめんと不虚作住持するはたらき、衆生を法蔵菩薩の願心に呼びさますのである。仏心より衆生を包み仏心に呼びさします大悲の誓願の力用である。その目覚めこそ、「世尊我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命し、安楽国に生まれんと願う」、浄土の精神生活に生きる「我一心」の自証である。

法蔵菩薩の修行は、『大経』に尋ねれば釈尊伝、仏陀の正覚体験（八相成道）にはじまる。

吾、まさに世において無上尊となるべし

という名のはじまる。その名のは、われ一人がさとしたという、お山の大将われ一人という個人の悟道、成道相ではない。どこまでもその無上尊の名のは、

群生を荷負し、之を重担となす

という衆生への深い関わりにおいての成就である。愛憎違順に苦惱し、衣食住にあくせくと勤労の日々を生きる衆生、群生、群萌の苦悩を担ったところの大悲心の名のりに他ならない。

吾、まさに世において無上尊となるべし

いい換えれば、

“ある日、ひとりの人がこの現実の歴史の上に仏陀と成った”

ということである。

その“仏に成った”という名のは、真理の目覚めは「衆生から仏への道」（自利）であると同時に、「仏から衆生への道」（利他）の内容にあるといえる。

「仏に成った」という名のりが、

「法蔵が阿弥陀に成った」

「阿弥陀が法蔵に成った」

という、真理の目覚めダルトの二義^①によって示されているとあってよいであろう。そのことは仏の法の目覚めが、仏のみにとどまらず衆生を包み、すべての衆生を仏の国に生まれさせようというところにある。

五念門の行といえは、入門は「衆生から仏への道」、出門は「仏から衆生への道」といえる。礼拝、讃嘆、作願、観察の入四門、『論』には、

菩薩は入四種門をして自利の行成就すと、知るべし。

といわれる。曇鸞はその「自利の行成就」について、「自利に由る故に則ちよく利他す。これ自利にあたわずしてよく利他するにはあらざるなり」と称している。また、出第五門、回向門については、

菩薩は出第五門の回向利益他の行成就したまえりと、知るべし。

と示す。「回向利益他の行成就」、その点について曇鸞は、「成就とはいわく回向の因を以て、教化地の果を証す」といい、続いて「利他に由るが故に則ちよく自利す。これ利他にあたわずして、よく自利にはあらざるなり」と称す。

そこでの五念門行、法蔵菩薩の修行による自利利他の成就とはいかなることをいうのであろうか。そのことは仏の正覚がどのように衆生の道となるかということである。天親、曇鸞は、本願力回向、阿弥陀如来の本願力のはたらきとして自覚する。仏の正覚は仏の自利にとどまらず、衆生の救いをもって如来としての自己（自利）を成就し、同時にこの世のいかなる衆生（利他）をも本願の機として成就するということである。如来の本願力の一心は、如来の成就と衆生の成就が、「親鸞一人がためなりけり」と、自身に信知されることである。

仏道とは、仏力、願力の誓願に目覚める道のことである。

『入出二門偈』には、

菩薩は五種の門を出入して、

自利他の行、成就したまえり。

不可思議兆載劫に、

漸次に五種の門を成就したまえり。(中略)

本願力の回向を以てのゆえに、

利他の行成就したまえり、知るべし。

無碍光仏、因地の時、

この弘誓を發し、この願を建てたまいき。

菩薩すでに智慧心を成じ、

方便心・無障心を成じ、

妙樂勝真心を成就して

速やかに無上道を成就することを得たまえり。

自利他の功德を成じたもう、

すなわちこれを名づけて入出門とすとのたまえり。

と示される。五念門の行が法蔵菩薩の修行によって讃えられている。その内容は、『論』の善巧撰化、障菩提門、順菩提門、名義撰体、願事成就によって示される。

その五念門、五功德門の自覚内容を私たちは天親の願生偈の信仰表白、一心の表白に端的に知る。

世尊我一心 歸命尽十方

無碍光如来 願生安樂国

我作論說偈 願見弥陀仏

普共諸衆生 往生安樂国

「世尊我一心、帰命尽十方無碍光如来」とは禮拜門、讚嘆門である。無碍光如来の名号、念仏を体とする一心帰命の信の自覚、自証のことである。「願生安樂国」とは作願門、觀察門である。一心帰命の信が願生と展開する自覚内容である。無碍光如来の名号、念仏に生きるということは、如実修行の奢摩他、毘婆舍那の止觀の成就である。凡夫の所造である三界を超えた浄土の行、如来の清淨願心が、穢土を生きる現実に内觀されてくるということである。そして「我作論說偈 願見弥陀仏 普共諸衆生 往生安樂国」の回向門は、眞実の作願、觀察が普く諸の衆生に回施され、施され、共に安樂国に往生する道が成就することの意味に他ならない。

三

曇鸞は五念門の行を積義していくところで、如実修行、不如実修行の問題を通して、作願に三義、觀察に二義、そして回向に二相を尋ねている。曇鸞の積義を通して考えていきたいと思う。いま、『論』、『論註』の文を引用する。

作願門 欲如実修行奢摩他故

觀察門 欲如実修行毘婆舍那故

回向門 回向為首得成就大悲心故

仏道の作願、觀察、その止觀は大乗、小乗に共通する道である。「諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教」と七仏通誡の偈にいわれるように「悪を作すなかれ、もろもろの善をせよ」、そのことが仏教全体を貫いている思想で

ある。

それ故、作願の「止」について次のようにいう。

「奢摩他」を訳して止という。止とは、心を一处に止めて悪をなさざるなり。(中略)心を鼻端に止めるがこともまた名づけて止となす。不浄観の貪を止め、慈悲観の瞋を止め、因縁観の癡を止む。かくのごときらをもまた名づけて止となす。

また、観察の「観」について次のようにいう。

「毘婆舍那」を訳して観という。ただ汎く観というには、義またいまだ満たず。なにをもつてこれをいうとならば、身の無常・苦・空・無我・九想等を観するがごときをもみな名づけて観とす。

そのように仏道に共通する止悪修善の道をはじめに説き、作願、観察、そして回向に曇鸞の独自の積義が施される。

作願門

云何作願 心常作願 一心專念畢竟往_二生安樂国土_一 欲_三如_レ実修_二行奢摩他_一故。

曇鸞は、『論』の文を積して次のように示す。

一は、一心に専ら阿弥陀如来を念じて、彼の土に生まれんと願すれば、この如来の名号およびかの国土の名号、よく一切の悪を止む。

二は、かの安樂土は三界の道に過ぎたり。もし人またかの国に生まれば、自然に身口意の悪を止む。

三は、阿弥陀如来正覚住持の力をして、自然に声聞・辟支仏を求むる心を止む。

この三種の止は、如来如実の功德より生ず、この故に「欲如実修行奢摩他故」とのたまえり。

第一は莊嚴功德の妙声功德、第二は清淨功德、第三は主功德が内容となっているといえる。

観察門

云何觀察 智慧觀察 正念觀_二彼_三欲_三如_レ実修_二行毘婆舍那_二故。

その文を釈して次のように示す。

一は此にあつて想を作して彼の三種の莊嚴功德を觀ずれば、この功德如実なるが故に、修行すればまた如実の功德を得。如実の功德は決定して彼の土に生を得るなり。

二は、また彼の淨土に生を得れば、即ち阿弥陀如来を見たてまつる。未証淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証す。淨心の菩薩と上地菩薩と、畢竟じて同じく寂滅平等を得。この故に「欲如実修行毘婆舍那故」とのたまえり。そこには「見阿弥陀仏、未証淨心菩薩、畢竟得証平等法身」ということがいわれている。

回向門

云何回向 不_レ捨_二一切苦惱衆生_三 心常作願回向為_レ首得_三成_三就大悲心_二故。

その文を釈して次のように示す。

回向に二種の相あり。一は往相、二は還相なり。

往相は、己が功德を以て一切衆生に回施して作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめんとなり。

還相は、彼の淨土に生じ已て、奢摩他、毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向えしむるなり。もしくは往、もしくは還、みな衆生を抜きて生死海を渡らさんかためなり。この故に「回向為首得成就大悲心故」とのたまえり。

曇鸞が、回向を往相、還相の二種相として了解するところである。かように作願の三義、觀察の二義、そして回向の二相が述べられている。

そのことに関連して、もうひとつ留意されることは、五念門の行は作願、觀察が重要な門である。仏、淨土に作願する「觀彼世界相」、「觀仏本願力」の觀察である。その作願、觀察が回向門をくぐると、

一切苦悩の衆生を捨てずして心に常に作願す。回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に。といわれ、また五功德門のところでは、

大慈悲を以て、一切苦悩の衆生を觀察して応化身を示して生死の園、煩惱の林の中に回入して神通に遊戲し教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。

これを「出第五門」と名づく。

と説かれる。五念門の入門にも作願、觀察があり、出門にも作願、觀察が示されている。入門（自利）を満足して出門（利他）に転ずるところに「回向為首得成就大悲心故」という、回向の二相の仏道了解があると考ええる。

四

回向に二種の相あり。一は往相、二は還相なり。

往相は、己が功德を以て一切衆生に回施して作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめんとなり。

ここでの「己が功德」とは人間の能力による衆生回向、菩提回向、實際回向という三種の回向、仏道の自利利他の道ではない。人間の能力によって仏を理想、基準とする道は、『論註』に「十地の階次というは、これ釈迦如来、閻浮提においての一つの応化道ならくのみ。他方の浄土はかくのごとくならん」、初歡喜地、離垢地等の十地の階次とは、「釈迦如来がこの世においての一つの応化道を示してくだされた教えにはかならない」。釈迦の応化道を理想、基準とした修道の歩みであつて、「他方の浄土」、阿弥陀仏の浄土はかならずしもそうではないのだと一地より一地に進級していく菩薩の歩みであるというならば、それは「超越の理」を知らないということであるという。ここでの「己が功德」とは、「見阿弥陀仏」、「阿弥陀仏を増上縁」となす法蔵菩薩の因位、法蔵の積集してくだされた己が善本、徳本の功德である。それは釈迦が「閻浮提の一応化道」を超え、釈迦が没して阿弥陀仏、無碍光仏を輝かす機、すべ

ての衆生に法蔵の功德宝を開いてくださったことである。それ故、「往相は、己が功德を以て一切衆生に回施して作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめんとなり」といわれていると了解することができよう。

また善巧摂化のところの「論」の文には、

何者菩薩巧方便回向。菩薩巧方便回向者、謂説礼拜五種修行、所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲抜一切衆生苦故、作願攝取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便回向成就。

といわれている。その文を釈して、曇鸞は「安樂淨土は阿弥陀如来の本願力の為に住持せられる」ところとして、次のように示している。

およそ回向の名義を釈せば、いわく己が所集の一切の功德をもって、一切衆生に施与して共に仏道に向わしむるなり。「巧方便」は、いわく菩薩願すらく己が智慧の火をもって一切衆生の煩惱の草木を焼かん。もし一衆生として仏にならざることあらば、我仏にならず。

そこでの「己が所集の一切の功德をもって、一切衆生に施与して共に仏道に向はしむる」という、回向を行ずる主体の菩薩は、「阿弥陀如来の本願力の為に住持」される法蔵菩薩の功用のことである。そこに火攝のたとえがださされている。火の箸で火をつけて草木を焼き尽くそうとすると、草木が焼き尽くされないうちに木の箸の方がさきに焼き尽くしてしまうと。衆生の流転に終りが無いが故に菩提心にも終りが無い、衆生が無辺であるが故に菩提心も亦無辺であるという願いは人間の作願ではなく、仏が衆生を荷負したところの作願である。「己が功德をもって一切衆生に回施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂淨土に往生せしめんとなり」と、仏の作願が衆生を包んですべての衆生を仏の国に生まれさせたいという願心の目覚め、法蔵菩薩の功德の回施こそ、穢土の中にあつて穢土を超え淨土へ歩む往相回向の功德、目覚めといえよう。

それ故に、先の作願の三義には仏道の実践である止悪修善の道をくぐる中に、妙声功德、清淨功德、主功德の内容

をもって無碍光如来の名号によび覚まされていく道が示されている。妙声功德とは

梵声の悟深遠にして、微妙なり、十方に聞こゆ。

といわれる。仏の名声によび覚まされていく道である。『重誓偈』には次のようにいわれる。

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らし。

仏の名声は、「為衆開法蔵 広施功德宝 常於大衆中 説法獅子吼」と、私たちの宿業の大地のところに説法獅子吼している。「衆のために法蔵を開きて、広く功德の宝を施せん」といわれる。いのちの根源である法蔵を覆い、貪欲、瞋恚、愚痴によつて暗い蔵を生きる心貧しい生活者に法蔵、本来の自己を開いてくださるのである。清浄功德、「彼の世界の相を観ずるに、三界の道を勝過せり」という浄土の功德は、三界の迷いを生きる私たちに「煩惱を断ぜずして涅槃分」を得るといふ力強い正定聚の身の位を得ることである。

主功德とは「阿弥陀法王、善く住持したまう」といわれる。安楽浄土の正覚阿弥陀善力に住持され、「三界雑生の火の中に生まるといへども、無上菩提の種子畢竟じて朽ちず」と菩提心、願生心に生きる道が成就することをいう。

五

宗祖の了解によれば、往相回向の行信の自覚は、

世尊我一心 帰命尽十方無碍光如来、願生安楽国、

という天親の表白にある。諸仏称名の願、至心信樂の願の自証のことである。無碍光如来の名号に帰し、一心帰命の信に生きる願生浄土の道である。

無碍光如来の名号の信知は、讚嘆門の阿弥陀仏の名義釈に示される。曇鸞は詳しくその点を釈義している。

何を以てか尽十方無碍光如来これ讚嘆門と知るとならば、下の長行の中に言く。「云何讚嘆門、謂称彼如来名」

如_二彼如来光明智相_一、如_二彼名義_一 欲_レ如_レ実修行相應_一故。
といわれている。

彼の如来の名、阿弥陀仏の名を称えるのが讚嘆である。その仏名を讚嘆することは「彼の光明智相の如く」といわれる。光明智相の仏力に相應することである。「実の如く修行し相應せんと欲す」という、如実修行とは仏の因力、願力のことである。つまり、法蔵菩薩が永劫に讚嘆の行を修行し給うことである。その名義に相應することが称名念仏の讚嘆門である。そして、無碍光如来の名号に相應する一心の自証は、

「如彼名義欲如実修行相應」は、彼の無碍光如来の名号は、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたもう。

といわれる。

無碍光如来の名号、本願の名号のよびかけの中にありながら、容易に現実に一心の自証が開かれない。曇鸞は、その自力執心の深さを凝視し、自力心にさ迷う人間の問題をみつめている。

しかるに名を称し憶念することあれども、無明なお存して所願を満ざるはいかんとすれば、如実修行せざると名義と相應せざるに由るがゆえなり。

称名憶念、信仰の道に歩む者の問いである。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせを……信ずるほかに別の子細なきなり」と、よき人の教えに遇いながら、念仏の一行が受けとめれない人間の問題、私たち衆生の深い自力執心の疑情、仏智疑惑の心の問題といえる。そのことが名義不相應といわれている。名とは名号、第十七の諸仏称名の願、無碍光如来の名号であり、義とは仏力が告知される信心、第十八の至心信樂の願の自証のことである。その点が次のように押さえられている。

如来は是れ実相の身なり、是れ物の為の身なりと知らざるなり。また三種の不相應あり。一には信心淳からず、

存せるかごとし亡せるかごときの故に。二には信心一ならず決定なきが故に、三には信心相続せず余念間だつが故なり。この三句展転して相い成ず、信心淳かざるを以ての故に決定なし、決定なきが故に念相続せず、また念相続せざるが故に決定の信を得ず、決定の信を得ざるが故に心淳らざるべし。此れと相違せるを如実修行相応と名く。是の故に論主建に「我一心」と言えり。

そのように「不知如来実相身、是為物身」という、如来の問題と三種の不相応、信心の確かめをとおして、「この故に論主建に我一心と言えり」と、行信の問題が確かめられている。

「往相回向の行信」については、『教行信証』の行巻、信巻の問題ではあるが、今回は『論』、『論註』の五念門行の往相回向の課題を尋ねたところで結びとし、いずれかの機会をまつて尋ねたいと願っている。

注

① 拙文「親鸞の仏陀観―法蔵菩薩」（日本仏教学会年報第五十三号）